

子どもたちの「即興的なことば」を引き出す教職志望学生の養成に関する実践的研究

園部友里恵（三重大学 大学院教育学研究科 准教授）

1. 目的と方法

本研究では、教職志望学生が恐れを抱く「即興的なことば」（＝子どもたちから発される、受け手にとって想定外の言動）について、「インプロ」と呼ばれる即興演劇が子どもたちの「即興的なことば」を引き出す教職志望学生の養成にいかに関与し得るのかを検討することを目的とする。そこで、**【学生たちの「即興的なことば」への恐れは、インプロを学ぶことにより軽減されるのか】**をリサーチクエストとし、「大学生チームによるインプロの学習」と「小学生対象のインプロワークショップ」という2つのアクションリサーチの場を設定して、インプロ実践と質的調査をベースとした研究を遂行する《教職志望学生×インプロプロジェクト in 三重》を始動した。

2. 実施内容

【学ぶ】2023 年 4 月、本プロジェクトに関心のある教職志望学生を募集したところ、10 名からの応募があった。6 月、10 名で「学生チーム」を結成し、チームメンバーを対象としたワークショップを繰り返し、インプロの基礎を学ぶとともに、学生間の関係性をインプロ実践を通して構築していった。

【関わる】子どもたちがどのようにインプロゲームに取り組むのかを参与観察する機会として、「第 1 回子どもワークショップ」を 2024 年 1 月に津市で開催した。18 名の参加があり、学生たちはサブファシリテーションに挑戦した。

【やってみる】学生たちが自らメインファシリテーターを担う機会として、「第 2 回子どもワークショップ」を 2024 年 12 月に四日市市で開催した。19 名の参加があり、学生たちは 3 チームに分かれ、インプロゲームのファシリテーションに挑戦した。

3. 調査の結果と考察

【調査 1】では、教職志望学生の恐れる「即興的なことば」とはいかなるものかを、学生チームメンバーの事前インタビュー調査の語りから明らかにした。その結果、彼らの恐れは、授業場面と授業以外の場面のものに大別された。前者については、学習指導要領や教科書、そして自身がつくった指導案を「台本」と捉え、学級集団に対して時間通りに教えるべきことを教えなければと苦悶する学生たちの姿が垣間見えた。後者については、他者を傷つけるかもしれない、子どもたちの「悪気はない」「ストレートに純粋な」「きれいな疑問」や「答え」のない質問への返答への恐れが語られた。子どもたちから放たれたそうした疑問や質問を深めるのか、流し、ごまかすのか。「教員」という立場としてこうしたことばにいかに向きあい応答していけばいいのか、彼らはまだつかみきれていない様子であった。

【調査 2】では、学生たちが子どもたちの「即興的なことば」といかに出会い、それに応答しようとしたのかを、「第 1 回子どもワークショップ」直後に実施された学生たちの「共同省察」での語りを対象に検討した。その結果、学生たちは、「検閲」のない子どもたちのアイデアや身体、そして豊かな反応と出会っていたことが明らかとなった。【調査 1】で語られた「即興的なことば」への恐れとは異なり、学生たちはインプロにおける子どもたちの「即興的なことば」を、驚きやすさとして感じ取ったことが見えてきた。

【調査 3】では、学生たちが自ら計画した「第 2 回子どもワークショップ」に着目し、インプロゲームのメインファシリテーションをいかに体験したのかを明らかにした。学生たちの語りからは、事前の計画通りにいかない現実と直面しながらも、子どもたちの多様な反応を肯定的に受け止め応答しようとしていった様子が描き出された。

【調査 4】では、学生たちの「即興的なことば」への恐れが、【学ぶ】【関わる】【やってみる】という一連の流れを通して変化したのかを、彼らへの最終個別インタビュー調査から明らかにした。その結果、本研究のリサーチクエストについて、次の解に辿りついた——**インプロは、学生たちの「即興的なことば」への恐れを完全には消し去らない。しかし、子どもたちから発される「即興的なことば」の豊かさに喜び、それらをおもしろがろうとする教師になるためのレディネスを学生たちに与えているのではない。**

4. 今後の課題

本報告書で扱った調査結果と考察は、得られたデータの一部（主にワークショップ実践の事後的な語りの分析）にすぎない。今後、非言語的なコミュニケーションや教職着任後の変化についても分析対象とし、本実践をより総体的に描き出す必要がある。